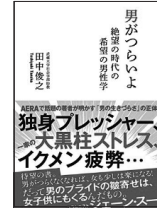


田中俊之著

『男がづらいよ 絶望の時代の希望の男性学』

(KADOKAWA、2015年 224頁)

金野 美奈子



現在、男性は不安の時代を迎えていると筆者は言う。男性が「普通の男性」として生きるハードルがとてつもなく上がってしまったからだ。「普通の男性」の生き方とはもちろん、学校を卒業すると同時に正社員として就職し、結婚し、家族を養い、40年ほど勤めあげて定年を迎えるという生き方を指している。

この国の近代の夜明け、欧米諸国からの訪問者を驚かせるゆったりしたリズムで生きていた男性たちは、その後100年の歴史の中で競争としての仕事に明け暮れる存在へと変貌した。「グローバル化の進展」、「広がる格差」、「ブラックな労働環境」、「人間関係の複雑化」などともない、このような男性像が根本的に問い直されているのが現代という時代だろう。

時代の不安を抱えるのは、もちろん男性ばかりではない。だが「普通の男性である」ことへのプレッシャーと、「普通の女性である」ことへのプレッシャーの間には、ある決定的な違いがあると思う。場合によってはあまり期待はされないがそう簡単に社会から排除されることも少ない女性に比べ、男性は、多くを期待されてもだめなら「敗者」や「役立たず」の烙印を押され、見えない存在へと押しやられる。戦後の日本では、男性を徹底的に選別し序列化するしくみに、かつてなく大量の男性たちが巻き込まれてきた。

1975年生まれの男性である著者は、社会学者として同性の経験を探る研究を重ね、大学で教鞭をとるかたわら、市民講座などでも多くの男性たちの声に接してきた経歴をもつ。男性向け市民講座の受講者といえば、10年前は定年後の人がほとんどだったが、今や30代、40代の参加も目立つという。

本書は現代の男性の「生きづらさ」をいくつかの側面から照らし出す。まず「仕事がつらい」。長時間労働をはじめとする日本の職場の現状は、仕事の場により強く縛り付けられてきた男性たちにとって、より大きな困難をもたらす。他の関心よりも仕事を優先することが当然視される職場で、男性たちは自己犠牲の精神をいかに発揮し続けている。嵐がこようが大地震が起ころうが朝9時に会社のデスクに座っている男性たちの姿が、それを象徴する。

そして「結婚がつらい」。仕事へのプレッシャーはいつこうに減らないまま、男性にはパートナーシップや家庭生活の面でもっと多くの役割を果たすよう期待されている。「普段はやさしいけど、いざというとき頼りになる」、「一所懸命に稼いでくれて、育児にも協力的」など、女性から男性への、さらに社会から男性への要求水準は高まる一方だ。平成26年度男女共同参画週間のポスターに描かれたのは、一瞬にしてスーツを脱ぎ捨てフライパン片手に空を飛ぶ、エプロン姿のスーパーお父さんだった。

さらに「価値観の違いがづらい」。価値観の違いは世代間でとくに顕著に表れる。時代にも支えられ「普通の男性」であることへの期待にまじめに応えてきた昭和世代、1990年代の家庭科男女共修化を経た、「普通の男性」像への疑問を隠さない平成世代、これら二つの世代の狭間で揺れる、著者も属する1970年代生まれの「アラフォー」世代。それぞれがその世代固有の課題を抱え、世代間の軋轢も高まっている。「オタク」「草食」などのレッテルが定着する一方、年長世代はともすればからかいの対象である。

このような「絶望の時代」を生きる男性たちに、筆者は同志として呼びかける。「まずは落ち着いて」。その呼びかけは、恨み節でも「リスク」感を煽りたてるアジテーションでもない。「普通の男性」をめざすことにとっての絶望の時代は、男性の新しい生き方を模索する冒険にとっては希望の時代でもある。現代を従来の生き方ができなくなった時代としてではなく、新たな可能性に満ちた時代として捉えようと、筆者は提案する。

とはいえ、本書は大上段に構えた社会変革論ではない。筆者によれば、これは「真面目にふざける」実践であり、現状に生きづらさを感じる男性が一步踏み出すための「ヒント集」である。世界の見方、捉え方を変えるさまざまな提案が、「他の男性と目が合ったら微笑みかけよう」、「仕事着でちょっと冒険しよう」、「花で女性に許してもらおうとするのはやめよう」といった、一見何気ない実践のアイデアで彩られる。「普通の男性」像を作り上げる一つひとつのパーツを小さくゆさぶってみることが、そのような男性像からの解放の入り口となるのだ。

ただし、問題はその先にもある。解放された男性たちはいったいどこに向かえばよいのだろうか。現代は多様化の時代だとして、「あなた自身はどんな生き方をしたいのか」と問いかける道もあるだろう。本書もときにそのようなアプローチに近づいている。だが、こんな漠とした問いにいきなり答えさせられるのは厳しい。その厳しさのあまり、「イクメン」などが「新たな生き方モデル」とされてしまっただけでは（筆者も指摘するとおりの現状そうなっている面もある）元も子もない。

本当の意味で自由な生き方とは、今、自分が生きている生活のディテールと真摯に向き合うこと、今の仕事の状況と、パートナーと、地域と、趣味と、一人の人間として向き合うことから生まれるのではないか——。筆者は軽妙洒脱、かつあたたかな口ぶりで、同性たちにそう語りかける。男性が置かれた社会の構造的背景に目配りしつつも、男性たちを「社会構造の被害者」の位置に閉じ込めない本書は、フェミニズムや女性学の意義も陥穽も、しっかりと見つめてきた人によって書かれたものだと感じる。

では女性には何ができるのか。女性の読者なら、そう問いたくなるかもしれない。男性を追い詰める社会を支えてきた人間の半分は女性だ。だが、ここで「女性として」何かしなければと考えてしまっただけでは逆戻りになる。私たちは、一人ひとりの男性が一人の人間として、仕事の場と、パートナーと、地域と、趣味と向き合おうとしたとき、そのまなごしをあたたかく受け止めて、あるいは同じ対象をまなごして寄り添う、やはり一人の人間でありたいと思う。

(こんの・みなこ／東京女子大学現代教養学部教授)